

最新刊

えほん 3歳から
クローバーえほんシリーズ
へんてこマンション
深見春夫・作
お菓子でできている部屋、家具が動きまわる部屋……。『へんな人大歓迎』のへんてこマンションの住人は、人間ばかりではありません。楽しさと夢がいっぱいの奇想天外絵本。 定価1,365円

えほん 3歳から
クローバーえほんシリーズ
ツムーリのおうち
とりこえまり・作
ツムーリは、かえるのエルくんの新しいおうちを見たら、自分のおうちがつまらなく思えてきて…。自分にとって、一番大切なものを見直すことができる絵本。 定価1,365円

えほん 4歳から
クローバーえほんシリーズ
あめふり あっくん
浜田桂子・作
「いやだよ。ママが行っちゃったよ」。あっくんが泣くと、お友だちが次々とあっくんを元気づけますが…。空から雨も降ってきて、あっくんの涙の雨はやむのでしょうか…。 定価1,365円

えほん 4歳から
しろくまのピナーク
葉 祥明・絵/文
ある日、双子の妹カナクが迷子になる。探しに行くママに留守番を頼まれたピナークでしたが…。環境破壊におびやかされるながらも、必死に生きる命を見つめます。定価1,470円

えほん 5歳から
大型ガイド絵本シリーズ
いちねんせいのはる・なつ・あき・ふゆ
おか しゅうぞう・作
ふじた ひおこ・絵
春、しゅんちゃんたちは一年生に。夏にはプール開きや夏休み、秋には運動会や学習発表会など、1年生の1年間の行事がわかります。定価1,575円

えほん 5歳から
おとうさん・おかあさんのしごとシリーズ
おとうさんはしょうぼうし
平田昌広・作/鈴木まもる・絵
ぼくの父さんは消防士。仕事に誇りを持っている父さんはかっこいい……。お父さん、お母さんの働く姿を通して、仕事とは何かを伝える新シリーズ第1弾。 定価1,365円

よみもの 小学校中学年
いのちいききシリーズ
牛太郎、ほくもやったぜ!
堀米 薫・作/岡本 順・画
ある晩、牛のお産を手伝った健太郎は、子牛の名付け親に。「牛太郎」と名づけ、その成長を見守る健太郎は、牛太郎に勇気づけられて、いじめを乗り越えていきます。 定価1,365円



クローバーえほんシリーズ 『まぐらのせんにとさんぼみちの巻』

かがくい ひろし・作

「どうされた、何かお困りか？」まぐらのせんにと、お供のしきさん、かけさんが繰り広げる、人助けぬくぬく話。乙女キャラでマシュマロのことばかり考えているまぐらのせんにと、しっかり者のしきさん、かけさんのやり取りは、楽しくてほんわかあたたかくなる一冊です。

●定価1,365円

特集 かがくいひろしさんのぬくもりにふれたい!

『まぐらのせんにとさんぼみちの巻』(佼成出版社)が発刊されました。まぐらとしき布団、かけ布団が織りなす、人情味あふれる楽しいお話です。シリーズになって、これからの展開も楽しみなところ。作者のかがくいひろしさんに、お話をうかがいました。

まぐらと布団を主人公にしたのは、どのような発想からなのですか?

何年も前から布団を題材にしたいなと、ノートにキャラクターを描いたり、いろいろなストーリーを考えたりしていました。ただ、なかなか納得のいくものができなくて、ずっとお蔵入り状態だったんです。でも、いつも頭の片隅に布団があって(笑)、あるとき、布団と別々に考えていたまぐらと一緒にしてみようと考えたら、うまくいったんです。

布団って、のほほんとしたイメージがありませんか? まぐらが主人公で、布団がサブキャラクターという組み合わせができたとき、しき布団の「しきさん」、かけ布団の「かけさん」というのが自然と生まれてきました。

布団は日本人になじみのあるものだから、題材にしたかったのですか?

あまり、日本的なキャラクターを掘り起こそうとか、そういう気持ちから、題材にしたかったのですか? 布団は日本人になじみのあるものだから、題材にしたかったのですか?

ぼくは、特別支援学校の教員をしていて、そこで人形劇をやっていた。いろいろなハンディを持つ子どもたちが興味を持つように、なるべくシンプルな動きと音を使って劇を上演しました。絵本も、その延長線上にあります。絵がシンプルで、文章も極力少なく、動きと音で構成されている絵本を描きたいんです。そうした教員生活で培ってきた感性が、読者をあたたかな気持ちにするのでしょうか。

ぼくは、身の回りのものすべてに、命があるという思いを意識しています。人形劇でホースに目をつけて動かしたり、あやつり人形が一本の糸に操られてずっと動き出したりする

はなくて、「子どもになじみのあるものって何かな?」ということがベースにあったと思います。そこで思いついたキャラクターが、たまたま布団だったという感じです。

布団にくるまって寝るときの、あの包まれている感じは、受け入れられて、あたたかい感じがしますよね。

『まぐらのせんにと』の乙女キャラがなんともいえずかわいいですね。

じつは、あの目は中川祥子さんなんです。たまたま新聞を読んでいたら彼女の写真が出ていて、「この目だ」と(笑)。ちょっとキラキラしてきれいでしょ。

まぐらは形をシンプルにして、なおかつ鼻と口は基本的に描かない顔にしようと考えていたので、目を目立たせたかったんです。正直言って「しきさん、かけさん」は『水戸黄門』を意識しているわけではないので、おひげの仙人が出てくると、完全に『水戸黄門』のパロディになっちゃうので……。それを避けるために、

とき、まるで命が宿ったかのように見えます。そういう動き出す瞬間がたまらない(笑)。

今まで乗っていた車を新車に買い替えるとき、「こ苦労様だったね」なんて、なせたりして。そんな感覚になりませんか(笑)。慣れ親しんだものって、そうそう捨てられないんですよ。

日本人は、「もったいない」という気持ちで物を大切にしたり、小さな命も尊ぶ気持ちを持っていますよね。

今の子どもたちも、そうした気持ちはあると思います。ただ、ぼくは絵本の中で、物を大切にしくちやいけないとか、そういうことは前面に出したくないし、それがねらいでもないんです。

まぐらは子どもらしい天真爛漫なイメージにしたかったんです。

『さんぼみちの巻』は、読者から「気持ちがあたたかくなる」「癒される」という感想が多く寄せられています。

そう思ってくれると、うれしいです。ただ、「癒される」というのをストリートに表現するのは、照れくさくてだめなんです。ぼくは、もともとクールな性格じゃないから、テレビを見ていても、本を読んでいるも、すぐ感情が入って泣いちゃう。最近では歳のせいかな、特にウルウルしちゃう(笑)。だから、あまり人間を主人公にしないのは、感情が入りすぎないためでもあります。

ぼくは、笑えて楽しめる本を創ってきたいんです。でも、王道のキャラクターたち、いわゆるクマさんとかウサギさんではなくて、普段、絵本に登場しないようなものたちに光を当てたいという気持ちが強いんです。だから、そういったキャラクターが生まれると、自分でもうれ

ぼくの絵本は、楽しんでほしい。げらげら笑って、親子で笑いを共有してもらいたい。

子どもを取り巻く環境は、今かなりきついですよね。その中で、絵本が持つ役割はどれだけのものなんだろうと考えることはありますが、でもこの状況に絶望もしていません。

ぼくが感じていることを、ちょっとでも子どもたちが感じてくれればうれしいな。

絵本のすこいところはね、自分が読むものではないということ。親や大人たちに読んでもらうということ。親や、他の本と違うところ。ひざの上に乗って、背中にお母さんのぬくもりを感じたり、抱かれています。お母さんの声、そうした安心感が、本を読んでもらった記憶にくっついていくのだと思います。

だから本はおもしろい

絵本作家 かがくいひろしさん



かがくい ひろし
1955年生まれ。第27回講談社絵本新人賞を受賞した『おもちのきもち』で絵本作家デビュー。主な作品に『はつきよい畑場所』(講談社)『だるまさんの』(プロンズ新社)などがある。